沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要（Bull. Mus., Okinawa Pref. Mus. Art Mus.），No.6, pp. 1－26, 2013

資料紹介

琉球国王尚家関係資料より『散形付并似例』

[1]與那嶺一子・[2]小野まさ子・[3]山田葉子

Material Note "Documents of Bingata Materials and Techniqus."

Ichiko YONAMINE Masako ONO Youko YAMADA

史料の概要

本史料は『乾隆五拾八年癸丑三月　散形付并似例　大美御殿』とあるように、乾隆五八年（一七九三）に大美御殿の所管により作成された史料で、尚家継承古文書（以下、尚家文書）中の一点である。

尚家文書には、本史料のほかに『納殿染賃例　大美御殿』があり、既に那覇市歴史博物館紀要第一号（二〇〇九）の中で宮里正子氏により翻刻されている。それを見ると、作成年も所管も同じである。しかも、該史料の末尾には、以下の四点の内容が記されている。①納殿の染賃例は以前からあったが、雍正十四年（乾隆元年＝一七三六）に調え替えた、②その後乾隆五八年（一七九三）までの五六年間には、例のない注文も「手形」の形式で行ってきた。③しかし、御用支えになっているので、この間の取り払い帳面をまとめて冊を作成して渡すので、以後は両冊を参考にして勘定方（支払い）を行うようにせよ。つまり、『納殿染賃例』と『散形付并似例』はセットであり、この両冊を参考にすることによって、大美御殿では一七九三年以降は注文や支払いが行われたと類推できる。今回、本史料を翻刻し、分析することにより、両冊の関係が明らかになってくることを期待するが、ここでは、その前提として、本史料が成立した十八世紀末の琉球という時代背景と、所管役所での機能についての説明を試みることにする。

まず、成立した時代を概観してみよう。乾隆五八年（一七九三）は、近世琉球の中でも、すでに王国末期にさしかかろうとしている時期で、十八世紀の中盤までに整備された王国の政治体制の安定も、そろそろ下降状態になっており、首里の士族達の中にも、経済的に逼迫し、地方に下って生計をなそうとするものも出、首里や那覇だけで士族が生計を立てていけなくなってきていた。また、外に目をやると、一七九七年に宮古島沖で座礁したプロビデンス号の事件は、この四年後である。この頃から沖縄島周辺にも異国船が頻繁に現れるようになり、また、災害や飢饉等の要因により、地方の行政が立ちゆかなくなって、「村倒れ」「間切倒れ」などという地方行政の破綻がおきつつある時期であった。この年の二二年前に「明和の大津波（乾隆の大津波）」が起きており、先島地域が壊滅的な被害を受け、人口の回復もままならない状況であった。このような状態の琉球王国ではあったが、一方で『伊江親方日々記』に見られる

1)沖縄県立博物館・美術館　〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1
Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, Omoromachi 3-1-1, Naha-shi, Okinawa, 900-0006 Japan.
2)沖縄県教育庁　文化財課　史料編纂班　〒901-1105　沖縄県島尻郡南風原町新川148-3
The Historiographical Institute, 148-3, Arakawa, Haebaru, Okinawa, 901-1105 Japan.
3)那覇市歴史博物館　〒900-0015　沖縄県那覇市久茂地1-1-1
Naha City Museum Of History, 1-1-1, Kumoji, Naha, Okinawa, 900-0015 Japan.

ように、王国の上層部では、長期に国政を執っている尚穆王の治世であり、この年の十一年後には、次王となる尚灝王の冊封も行われ、中国への朝貢も順調に行われていた。「正延紫」や「唐朱」のように、本文書に出て来る多くの染色材料が中国から入っていることがその証である。この王国が約八十年後には琉球藩とされ、その後王国そのものが明治政府により廃され、日本の一部である沖縄県となってしまうことなど、まだ本文書からはうかがいえない歴史ではあるが、王国時代の染織、なかでも染めについての細部の状況が判明しなくなっている今日、いわゆる「紅型」、史料では「形付」であるが、に関しては、「型紙」を除くと、職人の方々からの聞き取りや戦前の民芸協会一行の調査史料、また鎌倉芳太郎氏の調査研究資料によることが普通である現在、近世琉球社会崩壊の直前の時期に記録された史料の重要性は言うまでもない。

さて、次に、所管役所としての「大美御殿」と、もう一つ大きな役割を果たしている役所である「納殿」について考えてみたい。大美御殿は、十八世紀に描かれた「首里古地図」でも明らかなように、首里城外、綾門大道に沿い、向かいには玉陵や安国寺、御客屋、そして隣には皇太子殿である中城御殿の隣に位置している。そのためか、ペリー来航時には、ここが王国高官の屋敷として、迎賓の場にもなっているが、『中山世鑑』によると、古く琉球王国第二尚氏王統第四代の尚清王代の嘉靖二八年（一五四九）に創建されたとある。その理由は、神を迎える場である王城は潔戒しなければならない場所であるのに、城内で行われる王子・王女の出産が穢汚に当たるとされ、王城の潔斎のために新殿を造ったとされている。近世琉球以前に、王城の霊的強化として、女性たちの生活が規制されはじめたと考えることも出来るかもしれないが、ともあれ、近世琉球期には大美御殿は、十八世紀初期の王城焼失により一時期国王の行在所になった以外は、日常的には首里城の女官達の用務の場や休息の場として利用された。その中に、本史料を位置づけると、王族達や城内の女官達の衣服の調達などの機能も持っていたのかもしれない。しかし、王国末期の情勢は、この大美御殿さえも、異国人を首里城に入れないために、高官の屋敷と偽り、ペリーらを招いた迎賓の機能も附与されてしまうのではある。また、本史料にも大美御殿の他に「納殿」が時々登場する。この「納殿」が王府の食料品以外の物品の調達や保管に関わっていた役所であったことは、『琉球國由来記』等でも確認できるので、本史料の場合、納殿の職掌としての染色の中にも、より女性たちが関わる部分があったことを類推できる。女性たちに関する城内での暮らしなどもほとんど伝承でしかわからない現在では、これもまた新しい首里城を考える切り口になりそうである。

凡例

一、本史料は、那覇市が所蔵する「琉球国王尚家関係資料『散形付并似例』」である。

一、翻刻は可能な限り正字とした。

一、判読不明の文字は□で示した。

一、翻刻は、與那嶺一子、小野まさ子、山田葉子が担当し垣花久美子氏に協力していただいた。解説は「史料の概要」を小野が、「散形付并似例の内容」を山田、與那嶺が、「本史料所載の色名について」を與那嶺が担当した。

「散形付似例」の内容について

本稿では、「大散形付壱尋例」（以下「大散」）「中散形付壱尋例」（以下「中散」）「小散形付壱尋例」（以下「小散」）について述べる。

本史料は、大散（大型）・中散（中型）・小散（小型）の型紙を使い布地一尋を染めるにあたり、染める布帛素材、地染めの色と加色の色数等によって必要な染材・助剤他の材料の分量、紺屋の人件費、その他の経費を示したものである。体裁としては、全体が大散・中散・小散の別に分けられ、その中に一行目に『布帛素材-地染めの色-両面／片面染-加色の数』の順に記述され、それに続いて染材や助剤他の材料の分量、紺屋の人件費、その他の経費と記述が続く。

合計三二例があげられており、その内訳は「大散形付壱尋例」が十五例、「中散形付壱尋例」十四例、「小散形付壱尋例」が三例となっている。

◆布帛素材

形の大きさ別に布帛の素材をみると、「大散」では、木綿九例、白細上布、銅板斉、縮緬上布、永春斉、上布、白紗綾が各一例である。白細上布、銅板斉、縮緬上布、永春斉、上布はすべて両面形（両面染）だが、木綿、白紗綾は壱方形（片面染）である。

「中散」では木綿七例、銅板斉三例、白縮緬、花無紗綾、紋無紗綾地、下布が各一例である。銅板斉、白縮緬、下布はいずれも両面形であり、木綿、花無紗綾、紋無紗綾地は壱方形である。

「小散」では銅板斉が二例で、木綿が一例、銅板斉は二例とも両面形で、木綿は壱方形である。

本史料に記載されている布帛素材を、苧麻、木綿、絹とそれ以外に整理し表1にまとめた。表2は、沖縄県立博物館・美術館及び那覇市歴史博物館が所蔵する王国時代に製作された紅型の布帛素材である。紅型（形付）を染める素材は、琉球で生産されたものと、舶載されたものがある。芭蕉布は、史料にも一例だけみられるように、実例も少ない。詳細は素材別に記載した。

（表1）史料所載の布帛素材一覧

	苧麻素材	木綿素材	絹素材	その他
大散形付	白細上布 縮細上布 上布	木綿	白紗綾	銅板斉 永春斉
中散形付	下布	木綿	白縮緬 花無紗綾 紋無紗綾	桐板斉
小散形付	下唐苧	木綿		桐板斉
似例		木綿 白木綿布		机上白布 稀銅板斉・ 芭蕉苧

（表2）王国時代の紅型の布帛素材

	国宝	歴博	県博
苧麻（上布）	14	8	18
木綿 琉球産	17	9	30
木綿 舶載品			7
絹 平絹	2		2
絹 花紗綾	2	1	1
絹 綾	1		
絹 縮緬	3		1
絹 捩織	1		1
絹 紬	1		
桐板			10
その他（芭蕉など）		1	1
木綿と苧麻			1

＊国宝：琉球国王尚家関係資料　工芸品のうち紅型四一領
＊歴博：那覇市歴史博物館所蔵の福地家資料より紅型十八領・翠宮城家資料より紅型一領
＊沖縄県立博物館・美術館所蔵紅型より七二領（寄託品二領含む）と風呂敷一枚

【木綿】

琉球王国時代に染められた紅型衣裳の木綿素材には、琉球産木綿と舶載品がみられる（表1・2参照）。

北京故宮博物院には木綿布に染めた紅型（反物）が二二例残っており（註1）、その内四例は布端に「宮古嶋」の墨書があり、貢納布として納

めたことを示している（註2）。また、昭和十四年に沖縄で工芸調査を行った芹沢銈介はその著書で「宮古は上品を織りだし」（註3）と述べており、現在、上布の産地として知られる宮古島も、かつては木綿を生産していた。

舶載品は、西洋布・金巾と呼ばれる木綿布が、中国から入ってきた（註4）。布幅が広いものは、裁断して使用された作例が残る（表2）。裁断面の見られる木綿布には厚手から薄手までである。織幅そのままの作例は、琉球産か舶載品か判断が難しいが、宮古島や八重山諸島では木綿を栽培し貢納していることから、琉球産としてみてよいと思う。

本史料の「木綿」については、記載以上の情報がないため、琉球産か舶載品かは判断できない。

（註1）頁三六-五五、九二-九四『中国・北京故宮博物院蔵　琉球王朝の秘宝　沖縄特別展覧会　図録』帰ってきた琉球王朝の秘宝展実行委員会　二〇〇四年
『北京故宮博物院沖縄関連文化財調査報告書』沖縄県教育委員会二〇〇八年

（註2）頁五〇-五一　與那嶺「故宮博物院に残る染織　～中国・琉球の交流をみる～」『中国・北京故宮博物院秘蔵「甦る琉球王国の輝き」』沖縄県立博物館・美術館　二〇〇八年

（註3）頁八　芹澤銈介『琉球の形附』日本民藝協会昭和一八年

（註4）頁一七六-一七七　池宮正治「西洋布」『沖縄ことばの散歩道』ひるぎ社一九九三年
頁七、九、一四-一五小笠原小枝・石田千尋「紅毛船・唐船・琉球産物端物切本帳について」『MUSEUM　№四五六』東京国立博物館　一九八九年

【白紗綾・白縮緬・花無紗綾・紋無紗綾】

これらの布帛は、中国から入手した絹織物である。この他に捩織による絽なども使われている。紗綾は地紋の入った織物を示し、花紗綾は部分的に花丸紋が入る。飛び飛びに紋様がみられるので飛紗綾ともいわれる（註5）。尚家紅型（資料№紅型二九-二九紅色地龍瑞雲火炎文様紅型絹袷衣裳）がそれに当たる。「紗綾」「縮緬」「花紗綾」は薩摩から特注される事もあり（註6）、また江戸立の献上品・進上品にもみられる（註7）。

（註5）頁三五六　寺島良安編『和漢三才図会』東京美術　昭和四五年（史料は一七一二年頃編纂）

（註6）頁四-六　江洲安亨「伝世する染織資料からみた中琉交易史」『首里城研究　№一〇』首里城公園友の会　二〇〇八年
崎山健文「史料紹介「嘉永六年　表方御右筆間日記（一）」『黎明館調査研究報告書　第二三集』　二〇一〇年

（註7）『江戸立献上物進上物萬総帳扣』（那覇市歴史博物館蔵）

【白細上布・細上布・上布・下布・縮細上布宮古】

上布は宮古・八重山諸島で貢納布として王府に納めており、その品質を上・中・下に分け、さらに最上を細上布と定めていた（註8）。縮布も納めており、貢納布関係史料に「縮細上布」の記載はみられないが、本史料の縮布は細い糸で織った縮布と解釈してよいと思われる。

（註8）頁三一一-三一二「宮古島御用布座公事帳」『沖縄県史料　前近代7　首里王府仕置3』沖縄県教育委員会　一九九一年
頁七五、七八「冨川親方八重山嶋御用布座公事帳」『沖縄県史料　前近代7　首里王府仕置3』沖縄県教育委員会　一九九一年

【銅板斉（桐板斉）・永春斉】

これらの素材も中国からの舶載品である。銅板は、厦門から三十里程離れた村が産地で、明治以降も夏衣として重宝されていた（註9）。戦後輸入が途絶えたために、幻の繊維となり、リュウゼツラン説、苧麻説などがある。「永春斉」の素材は今の所不明だが、銅板と類似の素材であったと考えられる。

（註9）頁六、二七、二八『沖縄県史　資料篇5　染織関係近代新聞資料　技術Ⅰ』沖縄県教育委員会　一九九七年

◆**地染の色**

地染の色に注目すると、「大散」一五例の内「水色」が四例、「ふけ」が三例、「月白」「柿色」「浅地」「鶯」「おこん」「土器」「ふたう」「茶色」が各一例である。「中散」一四例の内、「玉色」、「月白」、「ふけ（ふく）」が各二例、「白地」「水色」「浅地」「おこん」「きゝん」「阿きふ」「柿」「土器」が各一例である。「小散」三例は、「浅地」「白地」「水色」が各一例である。詳細は「本史料所載の「色名」について」の項目を参照されたい。

◆**両面染／片面染、加色数**

「大散」一五例のうち、「両面形」（両面染）は五例、「壱方形」（片面染）は一〇例である。両面形（両面染）五例は、すべて「五色之差物入」つまり地染の上に五色を加えて染められたものである。「壱方形」（片面染）十例のうち、九例が「五色之差物入」であり、一例が「三色之差物入」つまり三色を加えて染められたものである。

「中散」十四例のうち、「両面形」は五例、「壱方形」は九例である。両面形五五例のうち、三例が「五色之差物入」、二例が「三色之差物入」、一例が「弐色之差物入」である。「壱方形」九例はすべて「五色之差物入」である。

「小散」一四例のうち、「両面形」は五例、「壱方形」は九例である。両面形五例のうち、三例が「五色之差物入」、二例が「三色之差物入」、一例が「弐色之差物入」である。「壱方形」九例はすべて「五色之差物入」である。

これら、①型紙の大きさ②布帛の種類③地染の色④両面染／片面染⑤加色の数、の五つの条件の組み合わせに注目すると、同じ組み合わせのものは一つもないことが分かった。

五つの諸条件の組み合わせによって染材や助剤他の材料の分量、経費等に差がある。染材とその他の素材について見ていきたい。

◆**染材**

本史料の中に登場する染材は一一種類あり、いずれも加色のための材料である。赤・黄・青・黒・白の五系統の色材がみられる。これ以外の緑、紫、橙等の色は基本色である五色を混色すれば造り上げることが出来る。本史料に記載される染材を顔料と染料にわけて整理した（表3）。

赤系統は「正延紫」「唐朱」「丹朱」、黄色系統は「槐花」「石黄」「黄土」、青系統は「和藍浪」、黒系統は「加治木墨」「五倍子」「皁凡」、白系統は「水粉」が記されている。

「五色之差物入」というときに最も多く使われているのは「正延紫」（赤）「唐朱」（赤）「槐花」（黄）「和藍浪」（青）「加治木墨」（黒）「水粉」（白）の六種である。ここに事例によって「丹朱」「石黄」「黄土」「五倍子」などが加わるが、その例は「石黄」が五例、「丹朱」が七例、「黄土」が二例、「五倍子」「皁凡」が各一例と全体から見ると少数である。基本的には六種類の色材を使用し、例外として丹朱や石黄などを加えて色相に変化を持たせようとしたと考えられる。

「三色之差物入」は二例あるが、一例が「正延紫」「槐花」「和藍浪」「加治木墨」の四種であるのに対し、もう一例が「正延紫」「唐朱」「槐花」「和藍浪」「加治木墨」「水粉」の六種であり、五色と三色の加飾でどのように色相が変化していたかは不明である。

一例しかない「弐色之差物入」は、「正延紫」「和藍浪」の二種である。すべての例で使用されているのが「正延紫」である。

紅型の色材については、二〇〇一～二〇〇二年にかけて行われた尚家染織品の非破壊調査の結果、朱（水銀）、黄（石黄）、青（鉄：ベロ藍）、青（藍）、緋色（紅花＋黄檗）赤紫（臙脂）、白（鉛胡粉）が使われていたことが確認されている（註10）。

顔料の唐朱（水銀朱のこと）、丹朱、石黄、黄土、染料の正延紫、塊

花は中国から輸入され、王国崩壊後も続いた（註11）が、戦後、途絶えた。黄土は土器色の染色に使われる。和藍浪、加治木墨は、その名から大和から入手されたものと推察される。正延紫は、虫の体液を円形の綿に染みこませたものが輸入されており、「七寸完」とは、綿の直径のことである。

加治木墨については芹澤が「薩摩の加治木に製墨ある事を聞くからそれとの関りを考えたい」と述べており、今後の調査を待ちたい（註12）。リュウキュウアイの藍花を集め、藍蝋をつくった話もあるが（註13）、ここで示される藍蝋は琉球製とは考えにくい。

五倍子はヌルデにできる虫瘿（虫こぶ）のことで、黒染の染料。中国、大和のいずれから入手したのか、史料から読み解くことは難しい。

皁凡は橡などの実（どんぐり）のことで、墨色の材料となる（註14）。しかし、実際に橡かどうか不明。また、墨色とするための媒染剤（鉄分）が示されておらず、染法は不明である。

水粉は白を染める染材のことで、鉛を使ったものと、貝殻から作られるものがある。鉛白は黒く変色する場合があり、絵画や紅型にその変色の様子が幾例か残っている（註10・15）。戦後、鉛白は使われておらず、王国末期には、貝殻を使う胡粉に変っていったものと思われる。

（表3）本史料所載の染材

	赤系統	黄系統	青系統	黒	白
顔料	唐朱・丹朱	石黄・黄土		加治木墨	水粉
染料	正延紫	槐花	和藍浪	五倍子・皁凡	

（註10）下山進・下山裕子「国宝「琉球国王尚家関係資料」《工芸品（染織資料等）の非破壊分析調査報告書》」『那覇市歴史博物館紀要　第一号』那覇市歴史博物館　二〇〇九年

（註11）頁七-九上江洲安享「伝世する染織資料からみた中琉交易史」『首里城研究　№十』首里城公園友の会　二〇〇八年
頁八四「明治三四年八月九日三面　琉球新報　清国輸入貨物の数量と価格」『沖縄県史　資料篇五　染織関係近代新聞資料　技術Ⅰ』沖縄県教育委員会　一九九七年

（註12）頁二五芹澤銈介『琉球形附』日本民藝協会　昭和一八年

（註13）真栄城興茂氏談（二〇一二年五月）「父（真栄城興盛）が、城間さんに頼まれてリュウキュウアイから藍蝋をつくった事を話していた」

（註14）頁二五八吉岡幸雄「涅色　皀色」『日本の色辞典』紫紅社　二〇〇〇年
頁一四八李應強『中國服装色彩史論』南天書局有限公司　民國八二年

（註15）琉球風姿画全（沖縄県立博物館・美術館所蔵）

◆助剤その他の材料

その他の材料として登場するのは7種類である。「明礬」「白大豆」「黏米・餅米」「炭・たん」の四種類がほぼすべての例にあげられている。例外として、前述の四種類加えて「麦芽」が二例にあげられている。いずれも染材に「石黄」が使われていることから何らかの関連が考えられるが、石黄が使われていながら麦芽が入っていない例もあり、詳細は不明である。また、「炭」が入っていない例も一例あり、これは「弐色之差物入」の例であるが、加色数と炭の使用の有無にどんな関連があるかは不明である。また、材料が「白大豆」のみという例も一例あり、これは染材が「正延紫」のみとなっているが、末尾近くに「形付賃四百文」「紅賃五色中模様之例」とあることから、表記以外に「形付」と「紅賃」がかかっているのでここで必要と記述されているのが正延紫と白大豆のみとなったと推測される。また、用途は不明だが一例のみ「薪木」「白灰」があげられている。

その他、染材か助剤か不明な材料として「ときぃ」というものが一例のみあげられている。

「黏米・餅米」は防染糊を示す。「餅米」は地染をする際の伏せ糊の分量を示している事から、「黏米」は型置きの糊を意味するのではない

かと思われる。

「白大豆」は、顔料を溶く呉汁を作る。その他、呉汁は、顔料の定着と滲み防止のため、防染糊を型置きした後で刷毛引きされる。「明礬」は、色の滲みを防止し、固着を促進に使われる（註16）。

「炭」「たん」は火を興すための用材かと思われるが、呉染で使われる灰汁を取るためとも考えられる。

「白灰」は、糊の腐敗防止に使われたのではないかと思われる。ただ、色に影響するので地染する際の伏せ糊には使われないと言われる（註16・17）。

「麦芽」は、麦芽糖として、藍などを建てる際に使うことが考えられるが、本史料では一例のみで、どのような場面での材料か不明である。

「ときゝ」「薪木」はどの作業で使用するものかよく分からない。

（註16）頁三九-四二渡名喜明　「紅型の型置きから仕上げまで-城間栄喜ノートをもとにして（その二）一」『沖縄県立博物館紀要 第5号』沖縄県立博物館　一九七九年

（註17）頁六七一『鎌倉芳太郎資料集（ノート編）題一巻　美術・工芸』沖縄県立芸術大学　二〇〇四年

◆材料の分量の比較

型紙の大きさや布帛素材、地染の色などによって染材の分量に一定の傾向があるのではないかと仮定して比較を行ったが、結果として染材を計上する一定の計算式などは発見できなかった。

例をあげると、頁五～七「銅板斉水色返し両面形ニ五色之差物入」と頁八～一〇「縮細上布幅壱尺六寸六分水色返し両面形ニ五色之差物入」は同じ「大散形付」で、布帛素材が「銅板齋」と「縮緬上布」と異なるが「水色返し」「両面形」「五色差物入」と共通項が多いのだが、正延紫の分量が「銅板斉～」は「壱枚八分三リ」、「縮細上布～」は「弐枚壱分壱リ」と一・五倍ほど開きがある。しかしその他の染材に大きな開きはない。

「縮細上布～」と頁一二～一五「上布水色返し両面形ニ五色之差物入」も同じ大散形付で素材が「縮緬上布」と「上布」という違いがあるが「水色返し」「両面形」「五色差物入」である。この場合正延紫は「縮細上布～」が「弐枚壱分壱リ」、「上布～」が「弐枚弐分四リ」とかなり近い。しかし唐朱が「縮細上布～」は「七分三リ」、「上布～」は「壱匁壱分三リ」とやはり大きく開きがあり、また、和藍浪も「縮細上布～」が「七分三リ」なのに対し「上布～」が「壱匁壱分三リ」と大きく開きがある。なぜ布帛素材の違いだけでこうも大きく染材の分量が異なってくるのかは不明である。

また、型紙の大きさでの違いに着目すると、頁五～七「銅板斉水色返し両面形ニ五色之差物入」と頁四七～四九「銅板斉水色返し両面形五色之差物入」は「大散」と「中散」だが「銅板齋」「水色返し」「両面型」「五色之差物入」と共通項が多い。染材は正延紫、槐花、水粉、唐朱まで分量にわずかな差しかない。しかし、和藍浪が大散「銅板斉～」は「六分三リ」なのに対し中散「銅板斉～」は「壱分」と大型の方が小型の六倍の開きがある。素材も、大散「銅板斉～」には石黄が入っているが中散「銅板斉～」にはなく、その代わり大散「銅板斉～」にはない丹朱が入っている。対して頁一五～一七「木綿水色壱方形ニ手加染五色之差物入」と頁七九～八一「木綿水色手加染壱方形五色之差物入」は、「大散」「小散」の違いはあるが「木綿」「水色」「壱方形」「手加染」「五色之差物入」と共通項が多い。染材は槐花、水粉、唐朱、和藍浪、加治木墨はほとんど分量の差がない。しかし正延紫が大散「木綿～」が「七分八リ」なのに対し小散「木綿～」は「壱枚六リ」と小さい形で染めた方が倍以上も多い分量になっている。

両面形と壱方形との比較では、頁三～五「白細上布ふけ返し両面形ニ五色之差物入」と頁二〇～二二「木綿ふけ返し壱方形五色之差物入」は「大散」で、「白細上布～」は「白細上布」、「木綿～」は「木綿」と布帛素材が異なるが「ふけ返し」「五色之差物入」は共通し、「白細上布～」は「両面形」、「木綿～」は「壱方形」であるが、材料の分量が細かい点までほぼ一致している。単純に考えると片面染と両面染では材料が二倍

違ってくるのではないかと思われるが、ここではほぼ同じなのである。

助剤についても同じく、型紙の大きさ、布帛素材、地色などの条件の違いによって細かく材料の分量が変えられているが、一定の計算式は容易には読み取れない。

このようにして、材料が片面染は両面染の半分の分量であるといったような、単純な計算式が使われているわけではない、ということが判明した。これら材料の分量を決定づけている要因は何なのか不明だが、今後類似する史料との比較によって情報が積み重なっていくことを期待したい。

本史料所載の「色名」について

本史料に記載される色名は三七例。この色名は地染めを示しており、その内訳を日本色名、中国色名、その他で分類し、表4にまとめた。まとめるにあたり、「紅」など色の総称と思われる色名は除いた。中国・日本に共通の色名が五例あり、それは日本色名に含めたが、それを抜いても一九例は日本の伝統的な色名であり、一七〇〇年代における紅型の作業では日本色名が多く使われていたことが確認できた。

（表4）史料所載の色名　―日本色名・中国色名・その他（註18）

日本色名		中国色名	青系統
日本の伝統色名	中国と共通する色名		その他
赤染・柿色 紺・藍・浅地・阿さき・水色・鶯・青染・若葉色 唐茶・茶色・土器色・くり梅・梅染・紺紫 本吉岡・吉岡・鼠色・ねつみ・赤鼠色	紫・ふたう色・黄色・香染・沈香色	老米色・深玉色・玉色・月白・天青色・豆色	ふけ・福く・呉染 きゝん・阿きふ 棕梠色・倍染・

「ふけ」「ふく」「呉染」「きゝん」「阿きふ」「棕梠色」「倍染」は日本色名、中国色名のいずれにも該当例がみあたらない。「ふけ」は「ぶき」、「ふく」は「ひぐ」のことで（淡紅色か／註19）、この色名は、現在も、紅型で使われている。また「呉染」は色名ではなく、色止めのため、大豆を溶いた呉汁を引くことを意味すると思われる（註20）が、久米島紬の伝統的染法として、ユウナの炭と呉汁で灰色を得る方法（「グーズミ」）（註21）があり、灰色を示すとも考えられる。日本色名には炭を水で濾して染める灰汁色（あくいろ／灰色／註22）があり、それとの関連も考えられる。「倍染」は、五倍子で染める「付子染」（註18）などの黒染を意味すると思われるが、これ以上の補足材料がないため、不明とした。また、「棕梠色」については、久米島吉濱家文書の「貢布カナ入目（仮）」に「赤すゝ竹ノコト」と記されており（註23）、赤味の焦茶を示していると思われる。「阿きふ」「きゝん」は何色を示すのか、また日本、中国、琉球のいずれの色名か不明である。

中国色名の「老米色」は、大正から昭和初期の報告（註24）によると、朱と臙脂で染める赤系統の色である。しかし、中国では「米色」は薄い黄色を示しており、本来の「老米色」はそれを渋くした色ではないかと思われる。しかし、いつの時点で赤系統を示す色名と変わったのか分からず、史料の示す色が赤系統か黄系統か判断が難しい。「深玉色」「玉色」は、青玉色のことであり、淡い青色を示す。詳細は、池宮正治が解説しているので、それを参照されたい（註25）本来、玉色は緑味の白であるが（註18）、琉球において淡い青色にと解釈が変わったと思われる。「深玉色」は「玉色」よりさらに濃い青を意味する。当館所蔵の重文「勅諭」には明孝宗より中山王へ「羅　玉色二匹」が贈られたことが記されていることも付け加えておきたい。「月白」は、白に近い水色のことである。「天青色」は『天工開物』（註18）の染法から、「水色」と解釈されているが、『中國服装色彩史論』（註18）では「天青・紺」の色相について「青紫色」と濃紺を示しており、また、鎌倉芳太郎のノートにも「赤味アル黒色ナリ」（註24）と記されている。「豆色」については、芹澤と同時期（昭和一四年）に調査を行った岡村吉右衛門が「緑に胡粉を混ぜた色」、「藍蝋に

胡粉を混ぜた色に福木か槐花で染めた色」と記し、「黄緑色」と報告している（註9）。『天工開物』や『中國服装色彩史論』には黄緑色を指す「豆緑」があり、この色名の緑が抜けて「豆色」となったのではないかと思われる。

（註18）色名の分類に当たっては下記文献を参考にした。
①長崎盛輝『日本の傳統色』京都書院　一九九六年
②吉岡幸雄『日本の色辞典』紫紅社　二〇〇〇年
③丸山伸彦編『日本史色彩事典』吉川弘文館　二〇一二年
④宋應星撰・藪内清訳注『天工開物』平凡社　一九六九年
⑤頁一四五-一五九　李應強『中國服装色彩史論』南天書局有限公司　民國八二（一九九三）年

（註19）頁四二渡名喜明「紅型の型置きから仕上げまで-城間栄喜ノートをもとにして（その二）-」『沖縄県立博物館紀要 第五号』沖縄県立博物館　一九七九年
頁三九屋富祖幸子『琉球びんがた一染』一染　二〇一〇年
頁六四七『鎌倉芳太郎資料集（ノート編）題一巻　美術・工芸』沖縄県立芸術大学　二〇〇四年
頁三〇芹澤銈介『琉球の形附』日本民藝協会　昭和一八年
＊「ブキ」について、城間は「「ヒグ」の色を淡くしたもの」と述べているが、屋富祖は「ヒグ」より濃い色味を示している。また、鎌倉は「赤ノ黒味アルモノ」と聞き取りしているが、芹沢は「とき色地」と城間と同様の淡紅色を指しており、紺屋によって色の解釈が異なっていたのか、時代的な変容なのかよくわからない。

（註20）現在行われる紅型の制作工程で、糊置き作業の後に色の滲み防止のために呉汁を引く。（頁四一渡名喜「紅型の型置きから仕上げまで-城間栄喜ノートをもとにして（その二）-」『沖縄県立博物館紀要 第五号』沖縄県立博物館　一九七九年）

（註21）頁四二、八四『平成十年度「久米島紬」保存伝承総合支援事業「久米島紬～あゆみとわざ～」』沖縄県仲里村教育委員会　一九九九年

（註22）頁一八〇長崎盛輝「一〇三灰汁色」『日本の傳統色』

（註23）頁二〇八與那嶺・山田「吉濱家文書「紬関係資料」より紬関係資料九題」『沖縄県立博物館紀要二六号』沖縄県立博物館　二〇〇〇年

（註24）頁七三二、七三四『鎌倉芳太郎資料集（ノート編）題一巻　美術・工芸』沖縄県立芸術大学　二〇〇四年
頁二九芹澤銈介『琉球の形附』日本民藝協会　昭和一八年（一九四三年）

（註25）頁九四-九六池宮正治『沖縄ことばの散歩道』ひるぎ社　一九九三年

（註26）頁五岡村吉右衛門『琉球古紅型　上』有秀堂　昭和四二年

また、本史料に記載される色名が、紅型の作業でどのように変わってきたのかを、表5でまとめ、文末に示した。中国色名は戦後、使われておらず、赤、茶、緑、黒灰色系統にみられる日本色名の多くが、時代の経過とともに使われなくなる様子がみてとれる。

【赤系統】

「ふけ（ぶき）」「ふく（ひぐ）」は、今も紅型の特徴的な色名として使われているが、現在その色味の解釈は工房によって異なる。「老米色」は戦後、使われなくなる。赤・赤ね（あかね）、柿色は大正期から使われず、戦後は、緋色（フィーイル）が赤を総称する。「花色」は大正期の報告から赤系統の色名として登場し、戦後も一部で使われている。

【茶系統】

近世にみられた茶系統の色名の多くは、大正～昭和初期にかけて二例を残すのみとなる。王国時代末期の紅型衣裳には茶系統の地色を染める作例は殆どみられない（註27）。土器色は黄味がかった薄い茶色であり、黄系統と判断されている可能性もある。近年は、和服の需要に合わせ、茶系統を地染めする例が増えてきている（註28）。

【黄系統】

「黄色」は「チール・チイイル」と呼ばれ、今もその色名が使われる。「金黄（チンオウ）」は、中国色名（註18）だが、近世の記録である本史料や『納殿染賃例』（註29）には見られない。

【緑系統】

他の色と同様に、「鶯」「みろ茶」「あいミろ茶」などの日本色名は、大正期以降使われなくなり、中国色名と思われる「豆色」も戦後はみられない。「オーサ・オーエージ」は緑を表す色名として今も使われており、史料の「青」はそれに当たる。

【青系統】

「月白」「玉色」「深玉色」「天青色」の中国色名は、紅型の染色の作業では、昭和初期には使われなくなる。今も使われている「ミジイル」「アサジ」「クンジ」は、琉球呼称でもあるが、伝統的な青系統の日本色名でもある。合成顔料、群青の利用に伴い、「グンジョウ」という新しい色名が近年登場してくる。なお、青系統の色名は各紺屋或いは工房で異なり、その差異が表5の青系統項目の多さを示している。

【紫系統】

紫系統では、王国時代の色名「紫」「葡萄色」「若紫」「桔梗」などが今も使われているが、工房によって使う色名が異なる様子も表5にみられる。

【黒・灰系統】

黒を示す「吉岡」「棕梠色」や灰色系統の「鼠」「呉染」「赤鼠色」の色名は、それぞれ、昭和初期には「黒（クルー）」、「灰色（フェーイル）」へとまとめられていく。王国末期から明治・大正期に染められた紅型には、黒を地染めする作品は殆ど残っておらず、一例を確認するのみである（註30）。

（註27）『紅型　琉球王朝のいろとかたち』サントリー美術館　二〇一二年

（註28）図版一一、三八、四四、四六、四七『玉那覇有公「紅型」』沖縄タイムス社　一九九六年

（註29）宮里正子「納殿染賃例」『那覇市歴史博物館紀要　第1号』那覇市歴史博物館　二〇〇九年

（註30）頁一七四-一七七　図版（深地紅型鎖大模様霞枝垂桜蝶菊籬文）『琉球紅型』青幻社　二〇〇五年

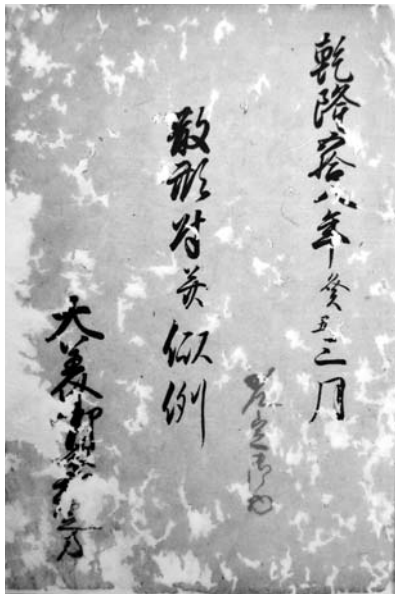
（表５）色名の変遷

●は地色　○は模様の色　◎色染（イロゾメ）

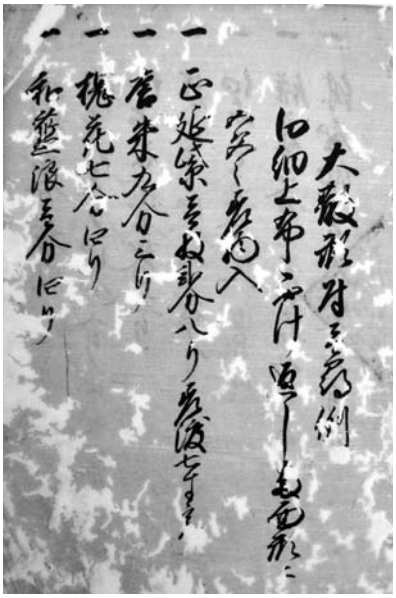
色名	年代・史料	琉球王国時代（1793年）		戦前（大正～昭和初期）			戦後	
		①（本史料）	②	③	④	⑤	⑥	⑦
赤系統	赤染・赤地	●	●	○	●	●		
	赤祢・緋		●	●		○	●○	○
	紅色					○		
	ふけ・ぶき	●	●	○	●	●○	○	○
	ふく・ヒグ	●		○	○	○	○	○
	桜色					○		
	藤赤染		●					
	老米色	●		◎	●	●		
	柿色・かき	●	●					
	橙色					○		
	ウチバ（落葉）						○	
	クチバ（朽葉）						○	○
	かは色		●					
	ハナイルジ・花色			●	●	●	●	
茶・黄系統	香染・香色	●	●					
	茶色・チャーイル	●	●	◎				○
	土器色・トチイル・じゅちいる・	●		◎	●	●○		
	唐茶・から茶	●	●					
	沈香色	●		◎				
	古銅色			◎				
	くり梅	●	●					
	梅染	●	●			○		
	すゝ竹		●	◎				
	棕梱色	●						
	とひ色		●					
	ひわだ		●					
	黄色・チイイルー	●	●	●	●	●	●○	○
	おこん（うこん）	●						
	チンオウ・金黄			◎	●	●	●	○
緑系統	青染・オーサ	●	●	●		○	●○	○
	をーゑーぢ				●	○	●	
	豆色・めみいるじ	●			●	●		
	鶯	●				●○		
	若葉	●						
	みろ茶		●					
	あいミろ茶		●					
青系統	月白	●						
	玉色	●	●	◎	●			
	深玉色	●	●		●			
	天青色・テンツァン	●	●	◎				
	すらいるじ・空色地				●	●		
	ミーヂ・ウスミーヂ			●		●	●○	
	水色・ミジイル	●		●	●	●○	●○	○
	浅地・阿さき・アサジー	●	●	●	●	●	●	
	フカジー			●				○
	藍・ゑーじ	●		●	●	●		
	ウスイェー							○
	紺・紺地	●	●	●	●	●	●	
	紺ひらう		●					
	紺紫	●						
	グンジョー・紺青						●○	○
紫系統	紫・ムラサチ	●	●	○	●	●○	●○	○
	ふたう色・ブドーイル	●		●	●	●○	●	
	アカムラサキ							○
	ワカムラサチ					○	●○	○
	藤色		●					
	桔梗・チチョー		●	○		●○	●○	○
黒・灰系統	本吉岡・吉岡	●	●					
	くろ・クルー		●	○	●	○	○	○
	ひんろうし		●					
	モウツァン			◎				
	フェーイル（灰色）			◎	●	●○	●○	○
	アカフェーイル（赤灰色）			◎				
	鼠色・ねつみ	●	●					
	呉染	●						
	赤鼠色	●						

本図の作成にあたり、下記資料を参照した。
①本史料：国宝　尚家文書『散形付并似例』（1793年）
②史料②：国宝　尚家文書『納殿染賃例』（1793年）
③鎌倉芳太郎：『鎌倉芳太郎資料集（ノート編）第一巻　美術・工芸』沖縄県立芸術大学　2004年（大正10～昭和12年）
④芹澤銈介：『琉球の形附』日本民藝協会　昭和18年（昭和14年調査）
⑤岡村吉右衛星門：『琉球古紅型　上』有秀堂　昭和42年（昭和14年～　調査）
⑥城間榮喜：渡名喜明「紅型の型置きから仕上げまで－城間栄喜ノートをもとにして（その２）－」『沖縄県立博物館紀要　第5号』沖縄県立博物館　1979年
⑦屋富祖幸子：『琉球びんがた一染』一染　2010

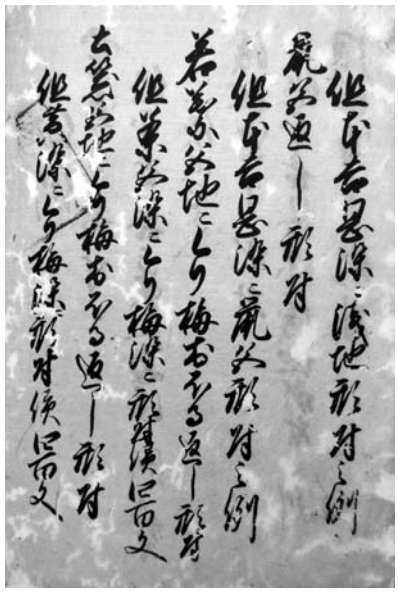
表紙（頁二）



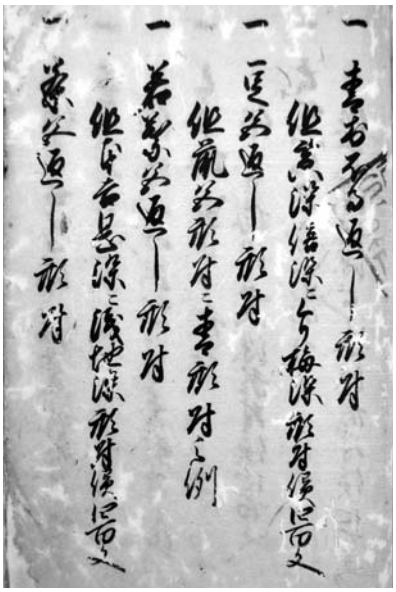
本文（頁三）



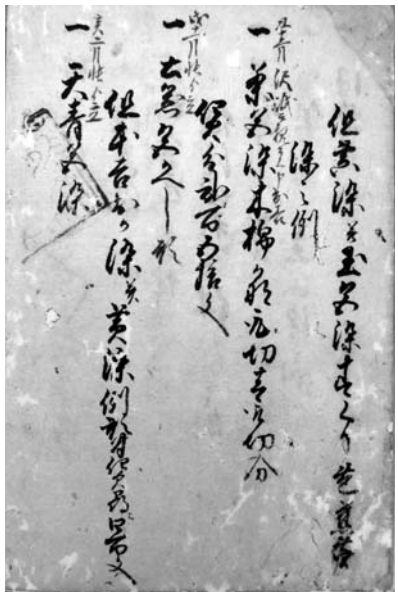
本文（頁八八）



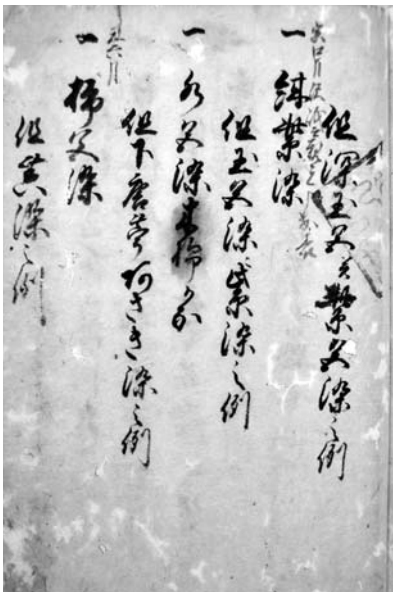
本文（頁八九）



本文（頁九四）



本文（頁九五）



散形付并似例

頁一……
乾隆五拾八年癸丑三月
散形付并似例
大美御殿

頁二……
乾隆五拾八年癸丑三月
かん定御物
散形付并似例
大美御殿

頁三……
大散形付壱尋例
白細上布ふけ返し両面形ニ
五色之差物入
一　正延紫壱枚弐分八リ差渡七寸完
一　唐朱九分三リ
一　槐花七分四リ
一　和藍浪壱分四リ

頁四……
一　水粉弐分弐リ
一　明はん壱匁四分八リ
一　加治木墨弐分九リ
一　炭壱斤四合八勺八才
一　白太豆壱合先
一　餅米三合壱勺弐才先
一　紺屋細工壱人五分六リ

頁五……
外
一　地染賃ふけ染之例
一　黏米引日用例
銅板斉水色返し両面形ニ五色
之差物入
一　正延紫壱枚八分三リ差渡七寸完
一　槐花壱匁八分壱リ

頁六……
一　和藍浪六分三リ
一　水粉六分弐リ
一　麦芽壱匁弐合四リ
一　石黄三分壱リ
一　唐朱七分三リ
一　明はん壱匁弐分壱リ
一　加治木墨六分弐リ

頁七……
一　炭壱斤弐合四勺三才
一　白大豆六勺弐才先
一　餅米三合壱勺弐才先
一　紺屋細工壱人三分九リ
外
一　地染賃水色之例

一　黏米引日用例

頁八……

縮細上布幅壱尺六寸六分水色返し
両面形ニ五色之差物入

一　正延紫弐枚壱分壱リ差渡七寸完
一　槐花壱匁四分七リ
一　和藍浪七分三リ
一　水粉七分三リ
一　石黄弐分壱リ

頁九……

一　唐朱七分三リ
一　明はん弐匁六リ
一　加治木墨七分三リ
一　白太豆七勺三才先
一　餅米三合八勺壱才先
一　炭三斤四合七勺
一　紺屋細工壱人七分六リ

頁一〇……

外
一地染賃水色染之例
一黏米引日用例

永春斉幅壱尺月白返し両面形
五色之差物入

一　正延紫壱枚三分差渡七寸完
一　槐花五分五リ

頁一一……

一　和藍浪壱匁壱分壱リ
一　水粉壱分六リ
一　唐朱弐分
一　明はん壱匁壱分壱リ
一　加治木墨弐分弐リ
一　白大豆四勺七才先
一　餅米弐合三勺五才先

頁一二……

一　炭九合六勺壱才
一　紺屋細工壱人六リ

外
一　地染賃水色染之例
一　黏米引日用例

上布水色返し両面形ニ五色之差物入

一　正延紫弐枚弐分四リ差渡七寸完

頁一三……

一　槐花壱勺五分七リ
一　和藍浪壱匁壱分三リ
一　水粉七分八リ
一　麦芽壱匁五分九リ
一　石黄三分九リ
一　唐朱壱匁壱分三リ
一　明はん壱匁八分五リ

頁一四……

一　加治木墨七分八リ

一　白大豆七勺先
一　餅米三合九勺三才先
一　炭壱斤五合九勺六リ
一　紺屋細工壱人六分八リ
外
一　地染賃浅地染之例

頁一五……
一　黏米引日用例
木綿水色壱方形ニ手加染五色之
差物入
一　正延紫七分八リ差渡七寸完
一　槐花七分九リ
一　和藍浪壱分五リ
一　明はん七分九リ

頁一六……
一　水粉七分九リ
一　唐朱七分九リ
一　加治木墨三分
一　炭七合八勺
一　餅米七勺五才先
一　白大豆四勺五才先
一　紺屋細工九分

頁一七……
外
一　地染賃浅地染之例
一　黏米引日用例
木綿柿色返し壱方形五色
之差物入
一　正延紫壱枚五分六リ差渡七寸完
一　槐花四匁壱分六リ

頁一八……
一　水粉壱匁四リ
一　唐朱八分三リ
一　和藍浪壱匁五分六リ
一　明はん三匁壹分弐リ
一　丹朱三匁三分弐リ
一　石黄三分壱リ
一　五倍子四匁三合六リ

頁一九……
一　皁凡三匁壱分弐リ
一　ときゝ四匁壱分六リ
一　炭壱升五合六勺弐リ
一　加治木墨五挺弐分
一　白大豆壱合四才完
一　餅米弐合八匁完
一　紺屋細工壱人五分六リ

頁二〇……
外
一　黏米引日用例
木綿ふけ返し壱方形五色
之差物入
一　正延紫壱枚五分三リ差渡七寸完

一　槐花四分四リ
一　水粉壱匁弐分弐リ

頁二一……
一　唐朱九分三リ
一　和藍浪四分九リ
一　明ばん壱匁五分弐リ
一　石黄弐分四リ
一　加治木墨壱挺弐分六リ
一　白大豆壱合壱勺先
一　餅米弐合三勺五才先

頁二二……
一　炭九合四勺壱才
一　紺屋細工壱人五分九リ
外
一　地染賃ふけ染之例
一　黏米引日用例

木綿浅地返し壱方形ニ五色
之差物入

頁二三……
一　正延紫壱枚三分差渡七寸完
一　槐花七分六リ
一　水粉八分九リ
一　唐朱八分
一　和藍浪弐分
一　明はん壱匁弐分九リ
一　加治木墨壱挺八リ

頁二四……
一　白大豆九勺三才先
一　餅米弐合先
一　たん八合
一　紺屋細工壱人弐分九リ
外
一　地染賃浅地染之例
一　黏米引日用例

頁二五……
木綿鶯返し壱方形ニ五色
之差物入
一　正延紫壱枚三分差渡七寸完
一　槐花三分七リ
一　水粉八リ
一　唐朱七分九リ
一　和藍浪六分七リ

頁二六……
一　明礬壱匁弐分九リ
一　加治木墨壱挺七リ
一　たん八合
一　白大豆九勺三才先
一　餅米弐合完
一　紺屋細工壱人三分五リ
外

頁二七……
一　黏米引日用例

木綿おこん地返し壱方形ニ
五色之差物入
一　正延紫壱枚五分五リ差渡七寸完
一　槐花三匁三分
一　水粉九分
一　唐朱八分

頁二八……
一　和藍浪三分
一　明はん壱匁三分
一　加治木墨壱挺九リ
一　白大豆九勺三才先
一　餅米弐合先
一　たん八合
一　紺屋細工壱人三分

頁二九……
外
一　黏米引日用例

木綿土器色返し壱方形五色
之差物入
一　正延紫壱枚三分差渡七寸完
一　槐花三分八リ
一　水粉九分

頁三〇……
一　唐朱八分
一　和藍浪六分七リ
一　明礬壱匁弐分三リ
一　加治木墨壱丁八リ
一　白大豆九勺四才先
一　餅米弐合先
一　たん八合

頁三一……
一　紺屋細工壱人三分六リ
外
一　地染賃黄染之例
一　黏米引日用例

木綿ふたう色返し壱方形
五色之差物入
一　正延紫弐枚差渡七寸完

頁三二……
一　槐花三匁五分九リ
一　水粉七分弐リ
一　唐朱七分弐リ
一　和藍浪七分弐リ
一　明はん三匁五分九リ
一　白大豆壱合四才先
一　餅米弐合三勺七才先

頁三三……
一　炭壱斤六合五勺弐才
一　紺屋細工壱人七分九リ
外
一　地染賃本よしおか染并ふけ染例
一　黏米引日用例

白紗綾ふけ返し壱方形三色
之差物入

頁三四……

一　正延紫壱枚五分四匁差渡七寸完
一　槐花五分九リ
一　水粉四分七リ
一　唐朱八分三リ
一　和藍浪五分九リ
一　明はん壱匁七分七リ
一　加治木墨三分六リ

頁三五……

一　白大豆五勺九才先
一　餅米弐合九勺六才先
一　炭九合四勺七才
一　紺屋細工壱人六分三リ
外
一　地染賃ふけ染之例
一　黏米引日用例

頁三六……

木綿茶色返し壱方形五色之
差物入

一　正延紫壱枚五分六リ差渡七寸完
一　槐花七分六リ
一　和藍浪弐分
一　水粉七分九リ
一　唐朱八分

頁三七……

一　明はん壱匁弐分九リ
一　加治木墨壱挺
一　炭八合
一　白大豆九勺三才先
一　餅米弐合先
一　紺屋細工壱人弐分九リ
外

頁三八……

一　地染賃浅地染并黄染之例
一　黏米引日用例

頁三九―四二（白紙（鎖印有り））

頁四三……

中散形付壱尋例

銅板斉玉色返し両面形五色
之差物入

一　正延紫壱枚七分七リ差渡七寸完
一　槐花壱匁九分
一　和藍浪壱分
一　唐朱六分三リ

頁四四……

一　水粉六分九リ
一　明はん壱匁九リ
一　丹朱壱匁弐分九リ
一　加治木墨六分三リ

一　白大豆六勺三才先
一　餅米三合壱勺先
一　炭壱斤弐合

頁四五……
一　紺屋細工壱人三分九リ
　　外
　　一　地染賃玉色染之例
　　一　黏米引日用例

　　銅板斉白地紺両面形ニ弐色之
　　差物入
一　正延紫三分八リ差渡七寸完

頁四六……
一　和藍浪七リ
一　明はん弐分五リ
一　白大豆七才先
一　餅米壱合四勺弐才先
一　紺屋細工五分壱リ
　　外
　　一　地染賃紺染之例

頁四七……
　　一　黏米引日用例

　　銅板斉水色返し両面形五色
　　之差物入
一　正延紫壱枚七分七リ差渡七寸完
一　槐花壱匁九分壱リ

一　和藍浪壱分
一　唐朱六分三リ

頁四八……
一　水粉七分
一　明はん壱匁九分壱リ
一　丹朱壱匁三分
一　加治木墨六分三リ
一　白大豆六勺三才先
一　餅米三合九才先
一　炭壱升弐合

頁四九……
一　紺屋細工壱人三分八リ
　　外
　　一　地染賃浅地染之例
　　一　黏米引日用例

　　白縮緬月白返し両面形ニ
　　五色之差物入
一　正延紫壱枚三分差渡七才完

頁五〇……
一　槐花七分六リ
一　和藍浪弐分
一　唐朱八分
一　水粉九分
一　明はん壱匁三分弐リ
一　丹朱壱匁
一　加治木墨壱挺八リ

頁五一……
一　白大豆九勺四才先
一　餅米弐合先
一　炭七合
一　紺屋細工壱人三分弐リ
一　銭六百文　　月白返し表染ニ入
外
裏染ニ入
同　一　地染賃紺壱方形之例

頁五二……
一　黏米引日用例
木綿浅地返し壱方形五色之差物入
一　正延紫壱枚三分差渡七寸完
一　槐花八分六リ
一　和藍浪弐分
一　唐朱八分
一　丹朱壱匁

頁五三……
一　水粉九分
一　明はん壱匁四分
一　加治木墨壱挺八リ
一　白大豆九勺四才先
一　餅米弐合先
一　炭八合
一　紺屋細工壱人三分六リ

頁五四……
外
一　地染賃浅地染之例
一　黏米引日用例
木綿おこん地返し壱方形五色
之差物入
一　正延紫壱枚五分五リ差渡七寸完
一　槐花三匁三分

頁五五……
一　和藍浪三分
一　水粉九分
一　唐朱八分
一　加治木墨壱丁八リ
一　白大豆九勺四才先
一　明はん壱匁三分
一　餅米弐合先

頁五六……
一　炭八合
一　紺屋細工壱人三分六リ
外
一　黏米引日用例
木綿月白返し壱方形五色
之差物入
一　正延紫壱枚三分弐リ差渡七寸完

頁五七……
一　槐花七分六リ
一　和藍浪弐分
一　水粉九分
一　唐朱八分
一　加治木墨壱丁八リ
一　丹朱壱匁
一　明はん壱匁三分

頁五八……
一　たん八合
一　白大豆九勺四才先
一　餅米弐合先
一　紺屋細工壱人三分
外
一　地染賃浅地染之例
一　黏米引日用例

頁五九……
花無紗綾きゝん返し壱方形
五色之差物入
一　正延紫壱枚三分差渡七寸完
一　槐花三匁三分
一　和藍浪三分
一　水粉九分
一　唐朱八分

頁六〇……
一　加治木墨壱挺八リ
一　明礬壱匁三分
一　たん八合
一　白大豆九勺四才先
一　餅米弐合先
一　紺屋細工壱人三分六リ
外

頁六一……
一　黏米引日用例

木綿阿きふ返し壱方形五色
之差物入
一　正延紫壱枚三分差渡七寸完
一　槐花壱匁壱分八リ
一　和藍浪七分五リ
一　唐朱八分

頁六二……
一　水粉壱匁壱分八リ
一　明はん壱匁四分三リ
一　丹朱壱匁
一　黄土九分
一　加治木墨壱挺三分五リ
一　たん八合
一　白大豆壱合弐勺壱才先

頁六三……
一　餅米弐合弐勺八才先
一　紺屋細工壱人七分壱リ
外
一　黏米引日用例

木綿柿返し壱方形五色
之差物入
一　正延紫壱枚三分差渡七寸完
頁六四……
一　槐花三匁三分
一　和藍浪三分
一　水粉八分七リ
一　唐朱八分
一　明はん壱匁三分
一　加治木墨壱挺八リ
一　白大豆九勺四才先
頁六五……
一　たん八合
一　餅米弐合先
一　紺屋細工壱人三分六リ
外
一　黏米引日用例
木綿土器返し壱方形五色之
差物入
頁六六……
一　正延紫壱枚三分差渡七寸完
一　槐花三分七リ
一　和藍浪七分七リ
一　水粉九分
一　唐朱八分
一　加治木墨壱挺八リ
一　明はん三分七リ
頁六七……
一　黄土九分
一　たん八合
一　白大豆九勺四才先
一　餅米弐合先
一　紺屋細工壱人三分六リ
外
一　黏米引日用例
頁六八……
木綿ふけ返し壱方形五色
之差物入
一　正延紫壱枚三分差渡七寸完
一　槐花三分七リ
一　和藍浪七分七リ
一　水粉九分
一　唐朱八分
頁六九……
一　明礬壱匁三分
一　加治木墨壱挺八リ
一　たん八合
一　白大豆九勺四才先
一　餅米弐合先
一　紺屋細工壱人三分六リ
外

頁七〇……
一　地染賃ふけ染之例
一　黏米引日用例
紋無紗綾地ふく返し壱方形
五色之差物入
一　正延紫弐枚壱分七リ差渡七寸完
一　白大豆弐勺四才先
一　紺屋細工七分弐リ
頁七一……
外
一　形付賃四百文
一　地染賃水色染之例
一　紅賃五色中模様之例
亥十月知念筑登之親雲上申出
下布玉色両面形ニ三色之差物入
一　正延紫壱枚三分
一　槐花壱匁五分
頁七二……
一　和藍浪弐分
一　明はん壱匁
一　加治木墨六分
一　白大ツ六勺先
一　餅米三合先
一　炭壱斤
一　紺屋細工壱人五分
頁七三……
一　薪木五勺
一　白灰五勺
外
一　地染賃玉色染之例
一　黏米引日用例
頁七四（白紙）
頁七五……
小散形付壱尋例
銅板斉浅地返し両面形五色
之差物入
一　正延紫壱枚八分五リ差渡七寸完
一　槐花七分四リ
一　和藍浪壱分四リ
一　水粉弐分弐リ
頁七六……
一　明はん壱匁四分八リ
一　唐朱九分三リ
一　加治木墨弐分九リ
一　炭壱斤四合八勺三才
一　白大豆六勺弐才先
一　餅米三合七勺壱才先
一　紺屋細工壱人五分五リ
頁七七……
外

一　地染賃水色染之例
一　黏米引日用例
銅板斉白地両面形五色之差物入
一　正延紫壱枚七分八リ差渡七寸完
一　槐花七分四リ
一　和藍浪壱分四リ

頁七八……
一　水粉弐分弐リ
一　明はん壱匁四分八リ
一　唐朱六分三リ
一　加治木墨弐分九リ
一　炭壱斤弐合七勺七才
一　白大豆六勺三才先
一　餅米三合壱勺弐才先

頁七九……
一　紺屋細工壱人四分壱リ
外
一　黏米引日用例
木綿水色手加染壱方形五色之
差物入
一　正延紫壱枚六リ差渡七寸完
一　槐花七分三リ

頁八〇……
一　和藍浪壱分五リ
一　明はん七分三リ
一　加治木墨三分
一　水粉七分三リ
一　唐朱七分九リ
一　炭七合九勺五才
一　白大豆四勺五才先

頁八一……
一　餅米七勺五才先
一　紺屋細工九分
外
一　地染賃浅地染之例
一　糯米引日用例

頁八二―八六（白紙）

頁八七
似例
鶯返し形付
但本本吉岡ニ茶色両染之例并形付　※両に〇（朱）
賃四百文
一　浅地返し形付
但本吉岡染ニ浅地形付之例
一　月白返し形付

頁八八……
但本吉岡染ニ浅地形付之例
一　鼠色返し形付
但本吉岡染ニ鼠色形付之例
一　若葉色地ニくり梅おふる返し形付
但茶色染ニくり梅染ニ形付賃四百文

一　土器色地ニくり梅おふる返し形付
　但黄染ニくり梅染形付賃四百文

頁八九……

一　青おふる返し形付
　但黄染倍染ニくり梅染形付賃四百文
一　豆色返し形付
　但鼠色形付ニ青形付之例
一　若葉色返し形付
　但本吉岡染ニ浅地染形付賃四百文
一　茶色返し形付

頁九〇……

　但本吉岡染ニ浅地黄染形付賃四百文
一　青おふる返し
　但ねつみ色形付ニ青形付之例
一　くり梅返し形付
　但くり梅染ニ黄染形付賃四百文
一　土器色おふる形付
　但黄染倍染ニくり梅染形付賃四百文

頁九一……

一　くり梅形付
　但くり梅染ニ形付賃四百文
一　くり梅形付ニ鼠色返し形付
　但本吉岡染ニ浅地染形付賃四百文
一　呉染おふる返し形付
　但鼠色形付ニ梅染形付賃四百文
一　赤鼠色返し形付

頁九二……

　但呉染形付ニ紺形付之例
一　沈香色染
午三月紺屋中并納殿等差引以立直ル
　但香色形付之例
　但黄染倍染梅染之例二而
一　老米色染
　但黄染倍染ニ玉色染之例
一　棕梠色染
　但赤染倍染ニ玉色染之例

頁九三……

丑六月
一　柿色染
　但黄染之例

此下八形代官例より写
一　藍おふる返し形付
　但浅地形付ニ紺形付之例
一　茶色木綿加す
　但黄染并玉色染之例
一　同芭蕉加す

頁九四……

　但黄染并玉色染本すぐり芭蕉苧
　染之例
丑十二月沢岻筑登之親雲上申出表
一　茶色染木綿カ那取切壱取切分
　賃銭弐百五拾文
戌十一月帳より立

一　土器色かえし形
　　但本吉おか染并黄染例形付尋ニ四百文
亥二月帳より立
一　天青色染
頁九五……
　　但深玉色并紫色染之例
寅四月沢岷筑登之親雲上出表
一　紺紫染
　　但玉色染ニ紫染之例
一　水色染木綿かな
　　但下唐苧阿さき染之例
丑六月
一　柿色染
　　但黄染之例
頁九六……
□八月
一　紺水色ニ而染分形付
　　但机上白布紺形ニ水色紅さし入例
午八月御内原御用　沢岷筑登之申出表
一　白木綿房三掛斤ニシテ三斤五合
　　但青染例無之付唐苧染例
紺屋主取　右同（〇で消し）　沢岷筑登之親雲上右同
一　八百五拾七文
　　但錫銅板斉壱尋晒買
頁九七……
右散返せ形付染物之類納殿染賃
例ニ無之等者現入目又者似シ之例ニ而印紙
払いたし候故時ゝ御用支ニ相成候
節茂有之候ニ付此程取払表表此節
一例取究申渡候間向後此通付届
可致候尤此外ニ茂例ニ可立品者則ゝ
可申出候上
頁九八……
乾隆五拾八年癸丑三月
　　大美御殿
　　外間親雲上
　　渡嘉敷親方
　　天久親雲方
頁九九……
　　勘定方
頁一〇〇―一〇一（白紙）